

---

# 雨と涙

朝衣海美

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

雨と涙

### 【Nコード】

N5354I

### 【作者名】

朝衣海美

### 【あらすじ】

失敗だらけの女の子が立ち直るまでのお話。

そうだ、あの日も雨だった。

私にとって大事な日。その日はいつも、雨だった。

大学受験に失敗して浪人初の夏は、ジリジリと暑く、勉強などとても手につかなかった。私は、医者になる夢を諦めかけていた。

じつとりとした空気に、音のない夏の昼間は、家にいてもどこにいてもなにも手につかない。唯一の趣味でさえ、やる気が起きない。私は、人生の墮落者なのだと思う。

晴天の霹靂、突然の雨に驚いて顔を上げると、嵐のような土砂降りの隙間から青空が顔をちらつかせていた。そうだ、あの日も雨だった。

高校卒業式。私はある人への告白を決めていた。大学に受かっていると信じていたから、告白をしようとしていた。そう、その日は3月には珍しい土砂降りの雨の日だった。朝からみんな、妙にそわそわしていた。今日で高校も終わりなのだと思うと、なんとなく寂しい気分になる。それほど高校が楽しかったわけでもない。好きだったわけでもない。だけど、やっぱりどこことなく寂しさを感じるのだ。

香川勇介くんは、3年間同じクラスで、いつもみんなの輪の中心にいて、中心的な人だった。私はその反対で、クラスに溶け込めず、いつも一人でいたから、彼をうらやましいと思いついて、憧れていた。その3年間、彼を想うことはそれなりに辛いことだったけど、私にはそういう風にしか高校生活をすごすことが出来なかった。

いつも勉強ばかりして暗い子だと周りから思われていた。私は勉強が好きじゃなかった。それほど頭も良くはなかった。だけど、父が医者をやっていて母が看護婦をしているためか、昔から医者になることを目標に生きてきた。私個人の目標は、特になかった。

父も母もそれを期待していたし、お兄ちゃんも医者になった。だから私も医者を目指していた。人間には興味がなく、獣医を目指していたけど、父も母もそれはそれでいいと思っていた。

卒業式のあと、直接告白するのは勇気がいった。私は誰にも見られないように彼のカバンに手紙を忍ばせた。彼は、帰る前にそれに気がついたのか、私の方をちらちらと見ていた。時折目が合うとフツとそらされた。いたたまれなくなつて、彼を見るのをやめた。

最後のホームルームが終わり、みんなが帰っていく。私も帰ろうと席を立ったとき、声をかけられた。そして、手紙を返された。

「ごめん、俺松下のことさういう風に見たことないから・・・悪いけど返すよ」

私は彼の顔を見ることは出来なかった。

傘は持っていたけど、雨の中をずぶぬれになりながら帰った。そして、大声で泣いた。人のいないところで・・・。雨が、全てをかき消してくれた。

その3日後、大学に落ちたことを知った。

何もかもがいやになった。父と母は1年くらい浪人してもいいと行って笑っていた。こういうところは他の親とは違うのかもしれない。優しい両親だと、私も思う。

今は夏。しめつた空気が体にまとわりついてイライラする。物に当たる。それから、人にあたる。

午後は予備校だ。行く気が起きない。でも、行かないと獣医になれない。私はなんで、獣医になりたかつたんだっけ・・・？思い出せない。昔何かあった。そう、何かあった。

そつだ、あの日も雨だった。家の前に、1匹の子猫が蹲っていた。そのそばで母猫が鳴いていた。私は急いで父を呼んだ。でも父は人間専門の医者だったから、猫のことは助けられないと言って、友達を呼んだ。その人はすぐに子猫と母猫を病院に連れて行った。車の中で、何度も

「大丈夫だ、すぐに助けてやるからな」

と呟きながら。

病院についてすぐに手術が行われた。母猫は手術室のドアを引っかいたりしながらそれでも待つているように見えた。野良猫が、こんなにおとなしいはずないと母が言った。

手術室のドアがあいて、父の友人が笑顔で出てきた。

「喉に、鳥の骨がひっかかっていたんだ」

子猫は一鳴きすると母猫の元へ走った。元気になった。しにそうだった猫が生き返った。それを見た私は、もともと動物が好きだったからというせいもあって、獣医になることを幼心に決心したのだ。あの日の情熱が、蘇ってきた。雨は、悪いことばかりをもたらすわけじゃない。そうだ、私の大切な日、雨が降っていることが多かったけど、楽しいことも辛いことも、嬉しいことも悲しいことも、全部雨は知ってる。そして、私がこうして怠けていることも。

きつと雨は励ましてくれるんだ。そう思うと気が楽になった。

「いつてきます」

「いつてらっしゃい、がんばってね！」

にっこりと笑い、見送ってくれる母に手を振って予備校へと急ぐ。そう、まだまだこれからだ。一度くらいくじけたって、また立ち上がればいいんだ。そう、これからだって、たっくさんの思い出が作られていく。それが楽しいことでも辛いことでも受けいれていくしかないんだ。

急に晴れ晴れとした気持ちになった。

気がつくくと、雨が上がって虹が出ていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5354i/>

---

雨と涙

2011年1月19日21時57分発行